

十五世紀フィレンツェのプラトニズム

片 山 佳 子

【要約】 十五世紀のフィレンツェは、伊諸都市との激しい生存競争の内にあつた。かつての繁栄を支えた毛織物工業と金融業が衰退期に入つた今、支配者層は、経済的失地を政治権力でもつてカバーせざるをえなかつた。こうしてメディチ政權下の商人政治家層は、益々政治的世界に巻きこまれ、政治家としての性格を濃くしていつたが、他方、文人芸術家仲間も今や私人的観想の内に止まることは許されず、政治的世界への介入を余儀なくされた。だが政治的世界に本来つきものの不安定さは、益々人々に安定の世界を求めさせる。フィチーノのプラトニズムは、このような人々の状況と意識を自己の課題として、そこに一つの解答を提示しようとしたものである。

はじめに

我国でも翻訳された A. von Martin の名著、Die Soziologie der Renaissance (1932) は、ルネサンス思想の社会的理解の一つの極点を示すものである。私がこれから問題にしようとするプラトニズムに関しては、明快かつ興味深い説明が、与えられている。だが、敢えて私はマルティンの説に異をたててみようと思う。マルティンを出発点に

えらんだ理由は、それがルネサンス理解に大きな影響力をもつているばかりでなく、私自身彼の考え方の枠からなかなか抜け出せなかつたからでもある。加うるに、P. O. Kristeller の Il pensiero filosofico di Marsilio Ficino (1935) は、フィチーノのプラトニズムに概説的知識とは異つた面のあることを教えてくれた。私はクリステラーの説明とマルティンの考え方を並べて、もう一度自分に問い直してみることにした。如何なる思想も一定の社会の、一定の歴史

的産物であるとするなら、一体フィチーノのプラトニズムは、どんな社会の中で生れ、育ち、普及していつたのか、一体それはどんな社会の、どんな課題を担っていたのか、それはどのように、フィチーノの思想の中へ結実していつたのかと。フィチーノのプラトニズムは、当時の社会における孤高な思想ではなかつた、それは広く社会に受け入れられた思想であることが知られている。その思想内容は、哲学的関心からも、文学や芸術に及ぼせる影響面からも多くの問題を含んでいる。だが今は、プラトニズムをそれが生れ栄えた社会の中へおき直して、それがそうあらねばならなかつた必然性とも云えるものを探つてみたい。だから思想を通して社会をみるとか、社会を通して思想をみるとか云うのではなしに、思想と社会ががつちりとかみ合う場、状況を問題にしたい。つまり、それ故にこそこれらの人々にとつてフィチーノのプラトニズムは親近なものであつたといえるような状況である。

ところでマルティンは、フィチーノのプラトニズムを真正面から取り上げている訳ではないが、その基本的な考え方は、プラトニズムの特徴とされる唯美的、瞑想的、思弁

的特徴を、企業精神の衰退による社会の静態化、大商人の保守化貴族化、文人的ヒューマンニストの生活理想の影響等と結びつけて説明しようとするものであつた。^③即ち、ブルジョワジーの大商人は、次第に旺盛な企業精神を失ひ、安全な財産の保有と安穩な生活を求めて保守化し、かつ政治への生き生きとした関心を喪失して貴族化していつた。この過程において、彼らは文人的ヒューマンニストの持つ観想的、浪漫的な生活理想に近づき、ますます非ブルジョワ化していつた。他方ヒューマンニストも、公共生活への献身を説き、政治への強い関心を示した初期ヒューマンニズムを離れて、閑暇で私人的自由を約束する隠遁へと後退した。この両者の後退過程において、「教養と財産とは今あらたに、以前とは異つた平面上に於て、即ち安穩と保証の、閑暇と享受の、経済的利潤活動にもとづく文明とは対照的な消費文化の平面上で邂逅した」。^④「観想的人間の、非ブルジョワ的浪漫的傾向が、閑寂な私的生活を守るための安穩と秩序とを求めるといふ極めてブルジョワ的な関心と結びついた」^⑤訳である。かくて、「活動的な世界、事業と国事の世界にそむいた彼らが互いにめぐりあつたのは、田園生活の静寂と

閑雅の中において、即ち今では彼らの内的態度の象徴となつた『別荘』においてであつた^⑤。メデイチ家の別荘における両者の社会的交り、それがプラト・アカデミーであり、その思想的表現がプラトニズムだと考えているようである。

しかし私達は問うてみよう、一体企業精神は衰退し、社会は静態化したのかと。ブルジョワジーは本当に政治への関心を失つたのかと。むしろこれは評価次第ではなからうか。というのも、企業精神の衰退にしても、それは十五世紀におけるフィレンツェの海上勢力への転身の事象を、積極的に評価することによつて反駁されうるからである^⑥。更に、この事態がそのまま瞑想や隠遁の精神とつながると考へるのは早計ではなからうか。企業精神の衰退を瞑想的プラトニズムと関連づけるのは、まことに合理的論理的なようにみえて、その実真実をあやまるものではなからうか。経済は確かに衰退過程にあつた。十三世紀にフィレンツェが持つた若々しい発展力は衰えた。だからといつて、それが一挙に隠遁へと誘うものだつたらうか。むしろそれ故にますます、人々に打開の道を探らせはしなかつたか。加うるに果してプラトニズムは、瞑想的で非社会的だつたらう

か。ヒューマニストもプラトニストも、マルティンが描く程浪漫的で、非社会的で、観想的だつたのではなくて、むしろ荒々しい政治の世界へ深くまきこまれていたのではなからうか。私はそれを探るためにも状況を問題にしたいと思ふ。

扱て、フィレンツェのプラトニズムを語るに際し、その代表者マルシリオ・フィチーノ Marsilio Ficino (1433—88) 個人の思想的形成や著作年代及プラトニズムの擁護者メデイチ家との関係等が、フィレンツェの政治経済とかみ合う時点を求めて、ロレンツォ・デ・メデイチ Lorenzo de' Medici の時代を主にとりあげたい。しかし、フィチーノの思想形成はそれよりも早く、又フィチーノはコンモ・デ・メデイチ Cosimo de' Medici と共にまず語られるべきであるからして、かなり一般化の弊はまぬがれないにしても、十五世紀におけるフィレンツェの社会状況からはじめよう。

① 邦訳『ルネサンス』——その社会学的考察——(昭二九年、創文社)

② 同書 第二章 第一節と第三節参照

- ③ 同書 一三五頁
- ④ 同書 一三四頁
- ⑤ 同書 一四〇頁
- ⑥ 永井三明「ルネサンス精神の動搖」『史林』一九五七、第六号) 六八—七三頁
- ⑦ コンモの晩年から、ビエロの時代にかけて、フィチーノは專ら翻訳に従事し、彼自身の著作は殆どない。ところが、ロレンツォの時代と共に、彼の最も活動的な時期がはじまる。今、著作、翻訳、注釈の主なものをあげれば、
- 七四年 Theologia platonica (脱稿) / De christiana religione.
- 七五年 De Amore; C. Landino, Camaldulenses disputationes (出版)
- 八二年 Theologia platonica 出版
- 八四年 プラトニーの対話訳出版
- 八六年 Enneadi 訳完成
- 九一年 Plotino の注完成

一 政治と経済の一体化

十五世紀のイタリア、それは熾烈な生存競争の時代であった。この生存競争に打勝つて生き抜くためには、強者といえどもますます自己を防衛してゆかねばならない。フィレンツェにおいても事情は同じであつた。フィレンツェの

繁栄と栄光を支えた二つの経済的基幹、それは人も知る通り織物工業と金融業である。しかし両者共に十四世紀の末以来、競争者の増大強大化と共に衰退の過程を辿りはじめた。もはやかつての独占的地位は失われつつあつた。この経済的衰退に直面して、フィレンツェも薄物への転向、流行的意匠の取り入れ、新生産方式の採用、絹織物工業の育成といつた手段でもつて劣勢の挽回をはかつた。しかし職人の引抜き、安売り、模造といつた手段でますます競争場裡にのしあがつてくるイタリア他都市との競争に対しては、このような単なる経済的枠内での技術的手段ではもはや對抗しえない時点に立ち到る。即ち激しい生存競争の中で自己の繁栄を維持していくためには、競争者を排除し、抑圧し、もつて自己の独占的優位を確立しなければならぬ。そのためにはどうしても政治的手段に訴えざるをえない。内に対しても外に対しても独占体制を強化する最も効果的な手段、それは政治権力に外ならないからである。こうして経済危機打開の道は、すぐれて政治の分野へ通ずるに到るのである。

一三九三年以来、大商人の寡頭政府が打つた政治的手段

による経済挽回策とは何か。それは自己産業の保護育成であり、海上勢力への転身であり、対外侵略であつた。まず一三九七年、ラーナ組合の要請に基づいて、政府は主として他の伊諸都市の毛織物輸入に対して禁止的関税を課した^③。けだし他国産毛織物の輸入は、フィレンツェ毛織物製造及其の工程に従事する人々に打撃を与えるからである。更に従来内陸都市として外港を持たず、ピサ、ジェノア經由で高税を課せられ、不利な競争下に立たせられていたフィレンツェ毛織物輸出のために、又羊毛原料の直接購入のために、海上勢力への転身をはかつた。即ち一四〇六年ピサの征服と共にピサ港を入手し、東方におけるピサの利権を継承し、一四一六年にはリヴォルノ港を購入し、consules *maris* の設置と共に、自国艦隊による自国製品の輸出に、又直接東方との交易にのり出した。十五世紀を通じてフィレンツェが東方に基礎を築いてゆく第一歩である。他方、フィレンツェは競争的隣諸都市の制圧にのり出し、その地の毛織物、絹織物業を破壊し、又は自国内に移植し、フィレンツェの規制下におこうとした。ピサ^④、ルツカへの征服戦である。この対外侵略は、土地獲得、食糧政策とも結

びついてフィレンツェの生存のための要件でもあつた。フィレンツェ毛織物工業不振のはねかえりは、この様に単に外へむかつただけではない。生存競争のための非情の論理が、国内にももちこまれた。即ち外的闘争に加うるに、国内での深刻な対立、同業者内部での競争が加わつたのである。ここでも人は、経済を支配せんがために政権の座をめぐつて、徒党を組んで相争つた。政治権力こそは、対抗者を倒す格好な手段であつたから。だが内部対立は単にここに止まらない。支配者層と被支配者層、上層親方衆と下層雇傭者との不断の対立が、国内に絶えず暴動の芽を出だしつゝあつた。しかもこれを抑えるもの、それは政治の外にはなかつた。

このように競争相手を倒すにも、不平分子を抑えるにももはや経済的手段では及ばなくなつた状況、フィレンツェの経済的衰退が内にも外にも政治権力の不断の介入を要請する状況、経済を政治で規制してゆかねばならぬ状況、十五世紀のフィレンツェがおかれたこの事態を、私は経済と政治の不可分一体化と呼ぶことにしよう。

コシモ・デ・メディチの登場も、この様な基本的状況を
変えはしなかつた。むしろそれをより積極的に打出すこと
となつた。私達は、政治と経済の一体化の様相、そのもた
らす結果を二つの方向においてみてとることが出来よう。

即ち、一つはメディチ派による国家の支配であり、他はアルテ(組合)の支配である。内政においてメディチ派の目指したものは、親メディチ派政権の確立、存続である。そのため彼らは様々な手段を用いたが、目的は結局一つのこと、対抗者の排除であつた。まずメディチ家は三代の間に、それぞれ最も有力な反対派を市から追放した。コシモに対しアルビッツィ Albizzi 一派、ピエロに対しオティサルヴィ・ネローニ Diotisalvi Neroni の一味、ロレンツォに対しパッツィ Pazzi 一派がこれである。同時に、市政機関へは常に親メディチ派の人々を送りこまれるようにと画策した。Accoppiatori を設けて、反メディチ派 priori の選出を妨げた。親メディチ派から成る Consiglio del cento を設置して、Consiglio del popolo の実権を骨抜きにした。更に注目すべきは、非常時下の一時的政治形態たる Balìa を合法的に常設化した。そしてパッツ

イ乱後、一四八〇年には Consiglio dei Settanta^⑤ を設けて、
国家の実権を全くこの限られた人々の手中に収めた。この
様な政治的手段と併行して、苛酷な課税政策が対抗者の没
落のために効果的に用いられた。^⑥ このため多くの人々が追
放されない迄も、田舎へ隠遁し、又は市外に立ち去つた。
こうしてメディチ派は、あたかも体内の異物を取り除くよ
うに、反・非メディチ派の人々を政権の座から遠ざけて行
き、ますます自派の勢を確立していつたのである。

だがメディチ政権は単に公の政治機関を牛耳つたばかり
ではない。彼らはアルテを支配しようとした。アルテの集
合体として国家があり、アルテの役員だけが国家の役人た
りうる制度にあつて、一国の政治と経済を支配しようとする
ものが、アルテの役員選出に口ばしをいれない筈がない。
コシモの登場以来、アルテ役員を選出はますます Signoria
の関与するところとなり、Signoria が任命する程になつ
た。その結果は、国家の高官イコール、アルテの役員であり、
アルテの役員は即ち国家の高官となり、ここに個々のアル
テは、アルテ内の自主性を喪失して常に国家の政治に結合
されることとなつた。^⑦ 更にこれと関連して重要なことは、

アルテ個々の独立性、独自性が失われて行くことである。十五世紀初頭におけるアルテの法令の改定と共に、職業別アルテの機能は重視されず、企業に投資せる資本の高が問題となつた^①。というのも、一四三四年以来、アルテの所屬者が他のアルテの成員たることがますます可能になつたからであり、業務が多分に相覆うものであつたからである。即ち、ここではカリマラ商人とかラーナ商人とか云うアルテによる区別ではなくて、金融業、織物工業、商品取引を一手に行う巨大資本の在り方が問題である。この様な巨大資本家は、二つ以上の大アルテに加入し、織元兼金融業者兼輸出入業者として、個々のアルテを支配することが出来た。

私達はこの様な巨大資本の担い手達をクローズ・アップすることにより、政治と経済の一体化への志向がもたらしたところのものを探つてみよう。まず彼らは、巨大資本の多角的経営を支配するもの、いわばその *top-managers* である。それは個々のアルテの枠をこえる存在でありながら、かつアルテの役員としてアルテ自体を支配するものである。更にそれよりして国政を掌握し、フイレンツェ共和

国を支配するものである。そして国策とは彼らの利害の反映であり、彼らの意志は国家の意志であり、企業経営と政策遂行とは表裏一体をなしていた。ということとは、他方において、彼らがメデイチ派として国家の政治と経済を支配するに到れば到る程、自己をますます強くメデイチ家の運命に、ひいてはフイレンツェ共和国の運命に結びつけざるをえない状況を生んだ。メデイチ家当主のみならずメデイチ派にとつて、フイレンツェ共和国の興亡を自己の興亡として、共和国の運命をそのまま自己の運命として同一視せざるをえなくなつたという状況、これこそ政治と経済の一体化がもたらした最も大きな結果だといえるだろう。

① A. Doren, *Italienische Wirtschaftsgeschichte* (1934) S. 546.

② *ibid.*, S. 546, 679.

③ *ibid.*, S. 495. 又一四一九年の法令によれば、死刑及財産没収の罰則をもって、市外での絹織物製品の生産、そのためのカンペリーの結成を禁じうる。C. Gutkand, *Cosimo de' Medici Pater Patriae* (1938) p. 251.

④ Doren, *op. Cit.*, S. 546.

⑤ 例はフイレンツェのみならず、ピサ、ミラノにもみられる。
ibid., S. 547.

- ⑥ C. Gutzkind, op. cit., p. 51. Buonaccorso Pitti の云うには、一四〇〇年頃シエーナを経由で九%、ピサを経由で一四%支払わされたらしい。
- ⑦ P. Silva. *Intorno all'industria e al commercio della lana in Pisa* (a cura di C. M. Cipolla, *Storia dell'economia italiana* vol. 1, Torino 1959).
- ⑧ Consiglio dei Settanta に関する L. F. Marks, *The Financial Oligarchy in Florence under Lorenzo* (E. F. Jacob ed., *Italian Renaissance Studies*, London 1960, pp. 123-147).
- ⑨ G. Manetti の例が有名
- ⑩ Gutzkind, op. cit., p. 272.
- ⑪ *ibid.*
- ⑫ *ibid.*, p. 237. 但し一面におうてギルドは加入希望者の適不適を決定出来たから、必ずしも自由であつた訳ではなからず。
- ⑬ Doren, op. cit., S. 457.
- ⑭ ロレンツォが父の死後、人々におされてメディチ派の首領におさまつた時のことを自ら述べた文の一節にある次の言葉は、よくこのことを示してゐる。即ち、自分は身にあまるこの重荷を、おしなうながらもひきあうけた、というのも a Firenze si può mal vivere senza lo stato d'acqua et d'oro. W. Welliver, *L'impero fiorentino* (Firenze 1957) p. 42.

二 内政と外交の一体化

この状況をより尖锐ならしめ、かつ最も鮮明に反映するものは実に当時のイタリア国家間関係である。十五世紀のイタリア内国関係は、近代ヨーロッパ国際政治の雛型といわれているが、伊諸国家をして、その様な緊密な對抗関係に追いこんだものは、伊諸国家間の熾烈な生存闘争であつた。経済的行き詰りを政治的手段で打開していかねばならない状況、それは十五世紀の伊諸国家が等しくもつた課題といえよう。それ故にこそ事態は、相拮抗する勢力の中で、ますます緊迫したものにならざるをえなかつた。十四世紀の末以来ミラノ公国は常に南、トスカナをうかがつた。十五世紀の初期、南伊を征したナポリ王は、これ又北上して、法王領、トスカナを我が物とせんとした。従来海上帝國として、半島本土の政治には一切見向きもしなかつたヴェネチア共和国が、トルコの進出におさえられて、新たに本土における領土獲得をめざして、半島の政治舞台に登場して来た。更に、かつての普遍的權威を喪失し、ヨーロッパの国際政治から身をひいた法王が、今や一世俗勢力として半島の政治関係にわりこみ、法王国家を建設しようとした。そして最後にフィレンツェ共和国は、トスカナの弱

少都市を支配下におさめ、トスカナ帝国^①の樹立を目論んだ。こうしてこれら五大国は、自国勢力圏の拡大をめざして、十五世紀の大半を相争つたのである。それは単なる経済闘争でも政治闘争でもなく、一つの経済的政治的生活圏をめぐる闘争であつた。いふなればこは、イタリア諸国家の生存利害が相争う最も高度な世界だつたのである。この場におけるメデイチ派というものは、フイレンツェ共和国の生存権を代弁するものであつた。メデイチ派は国家という状況は、ここにおいてますます自己を明確化せざるをえない。かくて一個人の乃至は一党派のための生存闘争が、個人乃至一国家という枠を越えて、全イタリア政治という国家と国家がかみ合うより高次の世界へ移されることとなり、メデイチ派は国家という関係がそのまま国際政治の中へ昇化せしめられるに到る。つまり極端に云えば、メデイチ当主一人の運命が、単にフイレンツェ内政のみならず、広く全伊的政治関係の次元へ結びつけられることになる訳である^②。

扱て、この様な各国家間の競争場裡におかれたメデイチ派にとつて最も肝要なことは何であつたらうか。それは内

政と外交の一体化である、そのためのメデイチ派への一層の権力集中である^③。加うるに平和の維持である。對外発展は、フイレンツェに課せられた基本的課題の一つである。

しかし、それは戦争という危険な手段によるものではなかつた。最も平和的で、最も商人帝国にふさわしい手段、即ち金と外交によるものであつた。成程、フイレンツェも十五世紀の前半を通じて常に戦乱の内にあつた。しかし、この長い戦乱に終止符をうつた一四五四年のロディの和以後、七八年のパッツイの乱に到るまでおよそ二五年の間、更に八六年より九四年に到る間、フレンツェのみならずイタリアは概して平和を享受しえたのである。平和こそメデイチ家の安泰とフイレンツェの繁栄を約束するものであつた。

對外戦争は市民に重税を課し、ために国内の不満をよぶたろう。国内の不満は、メデイチ派支配の根底をゆさぶるだろう。いわんや反メデイチ派の叛乱は、貪欲な近隣諸大國の介入を呼び、メデイチ政権のみならず、フイレンツェ共和國をも危殆に瀕せしめるだろう。對外的騒乱も国内的騒乱も、共にメデイチ家にとつては危険信号であつた。六六六年におけるデイオティサルヴィ・ネローニの乱、七八年に

おけるパッツィの乱は、この間の事情を如実に示すものである。それ故に、国家と自己の運命を同一視するメディチ派にとつて、平和は支配の根幹でなければならぬ。そのためには、ますます内政と外交における指導権を自己に集中しなければならぬ。国内におけるメディチ派政権の確立は、一貫した外交政策の展開を、国際場裡における一層の効果的行動を、可能にするだろう。ロレンツォ・ディ・メディチが、パッツィ乱後、内には行政改革を行つて一層の権力集中をはかり、外にはイタリアの平和のため、諸大國間の勢力均衡に心くだいた所以である。^⑤

では、コンモにはじまり、ピエロ、ロレンツォへとつがれた平和的手段による対外発展とは、究極的には何をめざすものであつたか。私はそれを W. Welliver の書に倣つて、Impero forentino という言葉で表現したい。Impero forentino の拡大すべき方向は法王領であつた。^⑥

この最も弱体な部分に向つてであつた。その方法は——ロレンツォの採つたことは、法王庁を征覇することである。メディチ家のための、フィレンツェのための法王をたてることである。そのためにまず大司教を得——これは失敗し

たが——、次で枢機卿を送りこむことである。そして最後にメディチ家の法王をたてることである。この最後の願いは、ロレンツォには遅きにすぎたとは云え、次子のジョヴァンニが、レオ十世として果してくれたことであつた。

他方、内政においてメディチ政権は、毛織物工業の保護、絹織物工業の育成発展、東方貿易の伸展に骨折つた。一四五八年には繊維製品のフィレンツェ領持込みを禁じ、絹織物業のためには国内における養蚕に努め、船舶企業助成のためには、フィレンツェ以外の船舶による輸出入に差別関税を課す等、自国商工業保護育成の道を講じた。そして東方君主とは年間契約を結び、東ローマ帝國滅亡後も、かえつてヴェネチアを圧して進出し、絹織物工業の繁栄も毛織物業の失地を補つてあまりあつたといわれている。こうして、絹織物業と東方貿易とは、動揺し衰退し行く毛織物業を助けて、十五世紀後半のフィレンツェを支えた二大支柱となつた。

しかし、それがどの程度にまで全体としてフィレンツェ経済にてこ入れしたか、どれ程多くの賃金労働者を、ふくれ上つたフィレンツェ人口を養ひえたかについては、私達

は測ることが出来ない。おそらくその利潤は、メデイチ派の大商人をうるおしたことだろう。多角経営を行う彼等は、そうした易くは打撃を受けなかつたろうし、フイレンツェの政治と経済を握っている限り、大きな利益は彼らのものであつたろう。だが、フイレンツェ毛織物工業がその最も多くの原料をイギリスから輸入していたこと、しかもそのイギリスで、十五世紀の中葉以降羊毛輸出が激減し、白地^①未仕上げ毛織物輸出が伸びていること等から考えてみても、それはフイレンツェにおける多くの羊毛加工にたずさわる職人を、不漸の失業状態に追いこんだことだろう。競争の激化による市場の狭隘化は、仕上げ工、染色工をも不漸に隷属的地位におとしめただろう。又絹織物工業が如何に織元親方層に利潤をもたらしにしたにしても、その製造工程の簡単さは、毛織物工業程の人口を養いえないであらう。たとえ東方貿易がのび、香辛料取引がフイレンツェ人の手に殆どおちたにしても、それがどれ程フイレンツェ住民の給養に役立つたろうか。毛織物工業都市として発展して来たフイレンツェが、多くの人口をかかえて今や毛織物工業の衰退に直面した時、それは上層織元親方層と下層職人層と

の間に、一層の対立を生んだことだろう。絹織物工業も東方貿易も、むしろ貧富の差の極端化に貢献するよう作用したことだろう。上層資本家をうるおした絹織物工業も東方貿易も、何ら一般大衆に恩恵を与えないものならば、フイレンツェ市内には、不平と不満と暴動の気が渦巻いたことだろう。ここにメデイチ家が国内平和のために打つた手は何か。それこそメデイチ家の名と共に語られる尠大な公共投資であり、施与であり、祝祭であつた。まことメデイチ家のおどろくべき富と個人的才能が、フイレンツェの内的矛盾をとまかくも平衡状態においていたのである。

① L'impero toscano という言葉は、實際ロシモが云つてゐる。Waller, op. cit., p. 42.

② パッツィ乱後の戦争状態におけるロレンツォの立場はその例。

③ Doren は、大商人階層の支配時代には、内政外交いづれも強く拡張的、戦闘的、攻撃的性格を持つこと、そして国家権力とそれと共に自己の経済的活動領域を拡大するに役立つな国際的戦争へまきこまれるのもいとわないと述べているが、(Doren, op. cit., s. 469) 私は以下の論の通り平和政策が根幹と考へる。

④ Waller, op. cit., pp. 42-43.

⑤ パッツィ乱後のロレンツォの伊政策に関しては、Waller,

op. cit., 及び R. Palmrocchi, *La politica italiana di Lorenzo de' Medici (Firenze 1933)* 参照

⑥ Welliver, op. cit., p. 43.

⑦ 一三九七年の法令は、主に伊産織物について行われたが、この年の伊及南仏産にまで拡張し、しかも輸入禁止とした。

⑧ 一四四〇年の法令によれば、土地所有者は全て新領内に五〇本の桑の木と、五〇本のアーモンドの木を植えることをきめられてゐる。Gutkind, op. cit., p. 253.

⑨ 永井前掲論文六九—七〇頁 Welliver, op. cit., p. 9.

⑩ Welliver は、この様に詳備するが、Doren はかなりその成果を悲観的にみてゐる。Welliver, op. cit., p. 9. Doren, op. cit., s. 680.

⑪ 岩波『西洋経済史講座』Ⅱ、二六一頁

三 ロンツィアーニの苦惱

さてここで私達は考えてみよう。メディチ派の人々がおかれた状況——経済的危機を政治的手段で覆つていかねばならない状況、そのために常に経済と政治の支配を求めて政權の座を確保してゆかねばならぬ状況、それ故にますます自己を一國の運命に結びつけざるをえない状況、外に對してはフィレンツェ共和国を、内に対してはメディチ派の利益を擁護してゆかねばならぬ状況——こういう状況の中

での人間の在り方とは、一体どのようなものだろうか、一体どのような人間が要求されただろうか。

私達は既に彼らが、巨大資本の、多岐的營業の Top-managers であり、金融業、織物工業、商品取引を一手に行う人々であり、同時にフィレンツェ共和国の支配者層であることを指摘出来た。彼らはこれら企業部門をより強く支配せんと志向する限りにおいて、ますます政治に結びつかざるをえない。そして一旦政治に結合した以上、支配は經濟の軌道を離れて、むしろ政治の軌道上を動いて行く。かくて人はより強く政治的でなければならなくなる。彼らが單なる homo economicus であつては、それと同時に homo politicus たること、否、唯 homo politicus たることだけが要求されてくる。Homo economicus たるシニヴァンニ・ディ・ビッチから homo economicus et politicus たるロシモへ、更に唯 homo politicus たるロレンツォへの、メディチ家当主の性格の変遷は、政治と經濟の不可分一体化の傾向と、更にはより強く政治的なものへの傾斜とを象徴的に示しているといえよう。

ここに私達は、彼らの在り方を端的に homo politicus と

して捉えることが出来よう。だが彼らは単なる *homo politicus* にとどまるものではない。彼らが政治に深く干入したとしても、それによつて商人たることをやめる訳ではない。彼らはどんな時にも商人であつた、云うなれば、彼らは商人にして政治家でなければならなかつたし、事実そうであつた。フイレンツェにおける彼らの地位と状況がそれを要求したのである。しかもその商人たるや、前述の如く多くの部門を兼ねるものであり、他方政治家としても時として行政官であり、外交官であり、財政責任者であり、又軍事責任者でなければならなかつた。職能未分化の時代におけるこの様な多様な在り方をも、私達は *homo politicus* という特徴と共に列記出来よう。

以上述べた如きメディチ派が、競争者を排除し、明確にメディチ政權として出現する時期として、ロレンツォの時代をあげることが出来よう。当時迄に如何にメディチ政權が確固としたものであり、かつ人々がメディチ家の下に歩もうとしていたかは、マキアベリの述べるところである^①。

しかしロレンツォにも反対派がない訳ではなかつた。ロレンツォに対する毀譽褒貶が相半ばしていた事実からも察し

られよう。それに対してロレンツォは、彼が味方として友人とも腹心とも頼む家柄の者達を、常に *Signoria* へ送りこむように、反対派の者達が多く選ばれることのないようにと努力した。だがロレンツォ政權が真に確立するのは、やはりかのパッツィ乱のきびしい試練を経なければならなかつた。以後、メディチ派というよりもむしろ親ロレンツォ派は、*Consiglio dei Settanta* を中心にフイレンツェを支配してゆくのである。ここに私達は、フイレンツェ内におけるメディチ派、更にその内におけるロレンツォを中心としたより小さい仲間、中心としてのロレンツォを想定することが出来よう。彼らは、メディチ家及ロレンツォの運命により強く自己を結びつけた人々であり、それだけに又ここには、同じ支配者層に属し、同じ経済上の利益を追求しているという意識と、それ故に又共通の敵をも有するところから来る協働の精神とが、友人という絆で結びあわされて、一つの社会的共属意識が生まれてくることとなつた。

ところが、メディチ家及びロレンツォの運命に自己を結びつけた人々は、このような商人「政治家層にとどまらな

かつた。私達は、ロレンツォを中心にしたもう一つ別のグループを抽出しなければならない。それは、メディチ家に経済的物質的援助を受けるころの文人・芸術家達である。彼らにとつてロレンツォは、まずはパトロンであつた。しかし単にそれだけの関係ならば、ロレンツォと文人・芸術家とは保護者、被保護者の段階に止まつたろう。いわんやロレンツォの運命に自己を結びつけ、彼を一中心とするには不十分であつたろう。しかしここには別なモメントがあつた。それはロレンツォが詩人であつたことである、しかも第一級の詩人であつた。ロレンツォのこの芸術的資質こそ、文人・芸術家をして、自分達と同じくミューズとヴィーナスに仕える同じ仲間であるという意識を抱かせ、自分達のリーダーに足るものと信頼させたものであつた^②。かくてここには、パトロンとしての性格を越えて一人のすぐれた芸術的個性とみなされたロレンツォを中心に、仲間意識で結びあわされた一つのグループが出現することとなつた。

メディチ家及びロレンツォに自己を結びつけることとなつたこの二つの別なグループ、それが今やロレンツォを通して交流し、ロレンツォを中心に一つに結びあわされる状

況が成立した。ここにおいて、商人と政治家グループと文人・芸術家グループは、相互に交友関係を結び、各々の枠をぬぐい去り、ロレンツォを中心にしたより大きいグループへと解消することが出来た。それは端的に云つて、どの様な関係であれ、ロレンツォという中心核へ凝集せしめられた同質的社会であつた。私達は以下この様なロレンツォをめぐる人々を又、Welliver に倣つてロレンツィアーニと称することにしよう^③。

しかし、二つの相異なるグループを結びつける絆となつたものは、唯ロレンツォだけではない。ロレンツィアーニにはもう一つ別な強力な凝集核があつた。それこそプラトニスト、マルシリオ・フィチーノである。フィチーノはコンモ以来常にメディチ家の庇護下にあつたのであるから、文人仲間の一人といえよう。しかるにその仲間内の一人にすぎないフィチーノが、同じ文人グループのみならず、ロレンツォをも含めた商人と政治家グループを自己のまわりに吸引出来たのは何故であろうか。この問に答えるためには、私達はロレンツィアーニのおかれた精神的状況とも云えるものを考えてみなければならぬ。

私は上に商人、政治家グループと文人・芸術家グループとが、より大きいグループへと自己解消をとげたことを述べたが、この解消過程は一体何を意味しているだろうか。思うにそれは、商人、政治家グループと文人・芸術家グループが、それぞれ自己固有の世界の中へ相手を包摂したことであり、それにより各々が相手の世界にも干渉するようになつたことである。商人、政治家グループが、自己の世界の中へ文人・芸術家グループを吸収することは、*homo politicus*としての彼らの政治の世界へ、文人・芸術家をまきこむことである。彼らをして、否定なしに政治の世界へ立ち入らせることである。ここにおいて文人・芸術家達は、マルティンの考えたように非社会的で、私人的観想の内に閉じこもつておれたであらうか。否、むしろ彼らは積極的に政治の世界へ参与せざるをえなかつた。政治の世界、それは具体的には、ロレンツォ及メディチ派が政治的プログラムとして持つていたところのもの、メディチ家の支配と *Impero fiorentino* の建設計画であつた。文人・芸術家達が、メディチ家の栄光のために働いたことは勿論である。だがそれと同時に、彼らはメディチ家の政治目的にも直接、

間接の働きをなしたのである。^④これは云うなれば、政治家ロレンツォ及政治的メディチ派への吸引作用である。かくてロレンツォを中心に、商人、政治家グループと文人・芸術家グループが政治的目的のために協働することは、ロレンツォを凝集核としたロレンツィアーニの、政治的世界における自己表現とみなせよう。

だが、*Impero fiorentino* の政治的世界だけが、ロレンツィアーニの世界ではない。商人、政治家グループが、自己の世界に文人・芸術家をまきこんだのなら、その逆も又存在するだろう。即ち、文人・芸術家達は、自分達の本来の世界、美と愛と知の世界へ *homo politicus* をいざなつたのである。それこそポリツィアーニの世界、ボッティチエリの世界、フィチーノの世界であつた。かくて商人、政治家達は、文人達の関心を自分のものとし、文人達の世界に自己を住まわせることとなつたのである。それは前とは逆に、文人・芸術家の側への吸引作用であらう。そして *homo politicus* としてのロレンツィアーニの活躍の場が、喧騒極まりないフィレンツェの街であり、イタリア全土であり、ヨーロッパや東方であるなら、文人・芸術家として

のロレンツィアーニが息づく場は、閑静なカレッジの別荘であり、プラトニー・アカデミーであり、彼ら自身の心の内であつた。しかもここにおいて、ロレンツィアーニが向う中心は、ロレンツォであるよりもむしろフィチーノであつた。

では何故にその凝集の中心がフィチーノでなければならなかつたか。私達はここにロレンツィアーニのおかれたきびしい状況を察知しなければならない。ロレンツィアーニの持つ一つの世界が政治の世界であるなら、フィチーノの世界とはまさにその両極端をなすものであつた。フィチーノの本来の世界、それは政治に深く入りこめば入りこむ程、痛切に感じざるをえない魂の世界であつた。それは *homo politicus* としての商人、政治家はもとより、今や深く政治の世界に干与することとなつたフィチーノをも含めた文人・芸術家にとつて、最も鮮明に意識せざるをえない心的世界であつた。

政治の世界は常に不安と動揺にみちている。イタリア内のみならず、ヨーロッパ諸国とのはげしい生存競争の中で、*homo politicus* はあらゆる術策を用いて自己の生存と繁栄

をはからねばならない。様々な野望が渦巻き、常に変動をくりかえすイタリアの政局の中で、又常に反対派が策動し、嫉視反目、不平不満が何時叛乱暴動へと転化するかもしれない不安なフィレンツェの政状の中で、メディチ政権は自己を維持してゆかねばならない。フィレンツェ共和国も、メディチ政権も、さて又メディチ派個人々の運命も、決して強固なものではなかつた。かつての栄光が昔語りになるのではないかという不安があり、未来のための夢と自負も、今日の現実の前には動揺する。経済のわずかの変動も、政局のわずかの變化も、希望と失望を交互に送りこんでくる。膨らみに膨らんだ期待も、一瞬の内に霧散してしまい、今日の榮華が明日の破滅に終るかもしれない。この様な不定の中で、彼らは生きてゆかねばならない。だが、彼らはこの様な動揺常なき中に生きることを誇りとしたであろう、不定の中に自己の確固たる運命を築くことに、むしろ誇りを感じたであろう。大波を乗りきる人の心にも似て、彼らはそこに自己の才能に対する自信と矜持を見出したであろう。とは云うものの、彼らの自信は同時に疑惑と不安を合せ持つている。有能で誇り高いフィレンツェ人が、全く自

信を喪失したということはない。しかし、不定の世にある限り、彼らが何の不安も何の絶望もなしに生き得た筈はない。

ともあれ政治の世界の事象は、さまざまな綾をなして心理の奥深く刻みこまれていつたことだろう。私はそれを十分に描き出すことは出来ない。だが、常に動揺と変動をくり返す現実世界に生き、内面にあつても希望と絶望の間を行き来する彼らにして、政治的世界への干与が深ければ深い程、より強く安定と静謐の世界を求めたことだろう。騒乱の世界ではなく、閑静の世界を求めたことだろう。勿論彼らは、心の不安に目をつむる手段を持つていなかつた訳ではない。マキアベリが描いたように、当時のフィレンツェは歓楽の都であつた。^⑥しかし、一時の享楽では解決することの出来ない問題がある。一時のごまかしにはくらまされない内面がある。成程彼らは美の世界へのがれたであらう、思弁の世界へ沈潜したであらう、だがそれでもまだ残る問題がある。内面の不安が直接つながる先、それこそ彼らの魂の問題でなければならぬ。彼らの救いの問題でなければならぬ。そしてこれこそ、フィチーノの世界であ

つた。

政治的世界への不断の介入を要請されるロレンツィアーニの状況、それ故にこそますます自己の靈魂の行方について思いを致さざるをえない状況、フィチーノは自らその状況下にいたが故に、それを自己のものとして考えることが出来た。彼は客観的な場と自己の内面に、その緊張した状況を持つことになつたが故に、ますます彼の本来の世界を強く意識せざるをえなかつた。そしてその中から、ロレンツィアーニのための救いを提示しなければならなかつた。Impero forentino がロレンツィアーニの政治的プログラムであるなら、フィチーノの哲学はロレンツィアーニの救いのプログラムでなければならぬ。ここにこそ、フィチーノがロレンツィアーニの別な凝集核たりえた所以があるのである。

この状況は、マルテインが教養と財産の邂逅と呼んだ状況に似ている。又別荘という閑雅な場所も同じである。しかしくりかえし云うように、これは高揚した活動的精神の後退過程における邂逅なのではない。瞑想も別荘も存した、だがそれは楯の一面である。この瞑想は、政治の世界での

不安で動揺する活動あつての瞑想であり、別荘はフィレンツェの街あつてのことである。活動を失つた思弁、瞑想ではなくて、活動と瞑想が緊密な対抗関係を持してはじめて成立する瞑想なのである。活動がますます活発になる程、それだけかえつて思弁的になるといふ思弁なのである。だがこの両者が、相互に自己をきわだたせればきわだたせる程、そこにはより強い対立意識が生じてくるだろう。それと同時に又、強い統一の意識も生まれるだろう。このきびしい対立の統一を志向したものと、フィチーノの哲学である。政治的世界への干与は不可避であり、同時に靈魂の救済もなさるべきであるという状況下におかれたロレンツィアーニの矛盾した意識、それをそのまま自己の意識として担つて出發したのがフィチーノの哲学であり、端的に云つて、政治と宗教を如何に統一するかの課題を果さんとしたものといえよう。私達は以下、フィチーノのアニマの論の内に、その解答をみて行こう。

① 邦訳『フィレンツェ史』(岩波文庫) (下) 二二二—二二四頁

② Reumont, Lorenzo de' Medici, II, p. 116, Welliver, op. cit., p. 106.

③ *Ibid.*, p. 23.

④ フィチーノは一四七三年僧籍入りしているが、これはロレンツォのすすめによつたといわれる。このことは、ロレンツォが、対法王、対カトリック教会政策にフィチーノを役立たせるつもりでなかつたかと推測させる。殊に、パッツィ乱におけるローマ法王の言動に対するフィチーノの非難、及同じく法王に対してアレツツォ司教 *Gentile Beccbi* の召集したフィレンツェ宗教会議は、かなり政策的臭いが強い。又、フィチーノの神学は、ロレンツォの対法王対教会政策とからみ合わせてみると、法王及教会に対するフィレンツェの理論的武器ではなかつたろうか。Welliver は、ランデイーノにもポッティチェリにも政治的なものを認めてゐる。Welliver, op. cit., p. 58, 101, 155.

⑤ 『フィレンツェ史』(下) 二二〇—二二二頁 Welliver, op. cit., p. 54.

四 フィチーノの靈魂論

フィチーノはまず日常生活における不安と苦惱、そしてこれと伴つて現れる内面的不安の感情から出發する^①。人間の生というものは、通常全く無関心の内にあるか、又は悲しみや喜びの不断の変動にさらされているものである。しかも、喜びや悲しみの到来に対して、人間の意志は全く無関係無力であり、むしろそれらを決定するものは、外的事

件や印象である。この様な人間の不定な在り方に対して、やがて人は自らの内に、奇妙で深い充実の無さ、はつきりしない不安を感じるようになる。もはやこのままの現実、及それと結びついた生活には満足は出来ないという内面的な感情がおこつてくる。ここに人は、自己の内なる深い不安に馳られて、外的物質的生活から背をむけ、遠ざかり、自己の内面へと沈潜しはじめ。自らの内へと向うこの意識を、フィチーノは瞑想、*vita contemplativa*と名づけるのである。この *vita contemplativa*、即ち内部意識は、その本性上不断の上昇過程を伴い、神の直接的直観という究極的目的に到達し、そこに平和を見出すまでやむことがない。この神の直観こそ瞑想の終局であり、人間行為の内最も崇高なるもの故、又人生の究極的目的である。

この様にフィチーノは、神の直観及び瞑想的生を人生の理想として想定する。これがフィチーノの世界であつた。しかし問題は、フィチーノの世界の理想を現実的な政治の世界とどう結びつけるか、活動的生と瞑想的生という、この相排斥しつづもいづれをも捨てることの出来ない二つの生き方を如何に統一するか、ということである。ここにおい

てフィチーノがまず示すものは、活動的生と瞑想的生との連続性である。両者の間に断絶はないのだということの論証である。即ち彼は、日常的經驗的認識から神の認識に到るまでの、同質的で段階的な上昇系路を措定したのである。

まずフィチーノは、認識主体たる *anima* に相異つた二つの方向、即ち叡智界と物質界へ向う二重の傾向を本来的なものとして附与する。かくてアニマは自己の内なる本来的欲求にせかれて、上は観想的神的事象の認識へ、下は經驗的物質的事象の認識へと向う。一方認識対象たる存在は、段階的系列をなして物質界から叡智界へと一つの連続的世界を構成し、神すらもその全系列から断絶したものは考えられない。そして如何なる經驗的物質的事象といえども、神的事象を分有することによつて成立するのであるからして、物質界の最下位的事象の認識でさえ、既に神的事象の認識への準備、否、無意識ながら神の認識と考えられる。神の認識は、実に經驗的物質的事象の認識そのものの内に含まれ、アニマは存在の上昇系路にしたがつて、認識の最上階、即ち神の認識へと到達出来るのである。こうして物質的世界は、そこに神的事象をも含むものとして、又經驗

的認識も神の認識へつながるものとして、活動的生が神の認識というまさにその理由の故に正当化されることになるのである。活動的生と瞑想的生は、何ら相対立するものではなく、むしろ連続的世界であり、活動的生はそのまま瞑想的生へつながる道であり、瞑想的生のためにはますます必要不可欠となる世界である。

しかし果して人間は、生ある間に瞑想的生において、神との合一を遂げることが可能であろうか。しかし、しかしながらとフィチーノは留保をつける、ごく限られた人々にとつて、しかも僅かの期間だけ可能である。では爾余の人にとつては？ それは来世に持ちこされ、彼岸の世において完成されるものである。神が全能であり、神の創り給うた宇宙が完全であり、被造物は全て各々の自然的目的に到達すべき筈のものならば、どうしてこのあらゆる動物の内最も完全な人間だけが、ひとり神の定めた目的に達しないということがあろうか。⑩ どうして人間の持つあの神を求める本来的欲求が不毛であることがあろうか。もしそうならば、人間は動物よりもつと悲惨なものとならう。人間にとつて究極の目的たる神の直接的認識が必ず到達さるべきもの

ならば、靈魂も又不死でなければならぬ筈である。肉体の死後も生ある靈魂が、現世にはなしとげえなかつたところのものを来世においてなしとげるのである。⑪

次でフィチーノは、相異なる方向に向う二つの欲求を持つアニメマを宇宙論の中で位置づけようとする。そこで彼は、プロティノスに倣つて、宇宙に実体のヒエラルキーを想定する。⑫ 宇宙は、Deus, Angelus, Animus, Qualitas, Corpus という五実体より成り、前二者が叡智界を、後二者が物質界を構成する。だが宇宙が一つの完成体として統一を要求する限り、叡智界と物質界という相反する領域、神と物質という宇宙の両極端、そして又ヒエラルキーの各々が統一されねばならぬ。その統一を担うもの、それこそかのアニメマである。⑬ アニマは宇宙の結び目として、叡智界、物質界のいずれにも固定しない独立した存在である。⑭ それは、自己の内なる本来的欲求にしたがつて、いずれの世界にも参与することが出来る。アニメマは、自己の持つこの活動性によつて宇宙に統一をもたらしどころの、動的媒介者なのである。⑮ そして宇宙の媒介者たるアニメマは、その役割と宇宙の結び目という呼称にふさわしく、叡智界と物質界の中間、

五つの実体の丁度真中に位置せしめられることとなつた。

私達は、この様なフィチーノの構想の持つ独自の意味を考へてみよう。彼が、アニマに相異なる方向に向う二重の傾向を附与しつつ、宇宙の統一者の役割を与え、しかも靈魂不滅の説によつて人間の救ひの可能性を構想したということとは、どういふことだろう。それは思うに、彼が経験界にも、又その經驗的認識からも離れがたい人間の生をも正当化し、人間の如何なる存在も神からはずれぬものではないこと、むしろその中に、つまり世俗の世の重荷をりつぱに担つた者にだけ、救ひの道が準備されていることを主張しようとしたのである。云いかえれば彼は、二重の本来の傾向のコントラストの内に、人間の本質を見出そうとしたのである。相異なる二つの世界、相異なる二つの欲求、それらはまことに相対立したものととして、ロレンツイアーニを云わばジレンマにおいこんだものである。相対立したものでありながら、そのいづれの触手からもがれることは出来ない。一方のために他方を解消することは出来ない。この状況の中でフィチーノは、人間とはまさにこのコントラストを生きるものだ、対立矛盾を生きるものだ」と悟つたの

である。そしてこの矛盾を生きる以外に、統一を生きる方法はないのだと悟つたのである。しかしその人間は、何の世俗的活動をもなさず、私人的觀想の内に沈潜し、ひとり神を思考し、この世の持つ不安や苦惱から身をよけている人間ではない。それは、この世の不安と苦惱を身を以つて生きる人間でなければならぬ。矛盾を統一するものは、矛盾を生きるものでなければならぬ、フィチーノはそう考へたにちがいない。こうして彼は、矛盾せる人間の生の全面的肯定のみならず、むしろその超克に達するのである。かくてフィチーノの提示した根本的解決は、矛盾の人生を生きるということであつた。それが結局神へつながらる道であつた。そこにおいて政治的世界は宗教的世界へ没入し、宗教と政治は即自の世界となるのである。

だがフィチーノの論は單にここに止まらない。更に一步をすすめて、この様な人間存在の尊嚴性を主張するに到る。それは、人間存在の消極的受動的肯定であるよりは、むしろ積極的にして能動的な人間主張といえよう。まず彼は、人間の尊嚴性を人間のアニマの持つ神的性格より導き出すとする。即ち、人間は神に等しい能力、神に類似の屬性

を持つてゐること、人間は神にまで到りうる存在であること、人間は創造者たる神の仲間であることを主張する。それはいわば、アニマの神化をはかることによつて、人間の尊厳を主張しようとするものである。しかしこの際直ちに気付くことは、その神的性格なるものが、アニマの持つかの普遍的性格に裏打ちされていることである。つまり、存在の全領域へむかう本来の欲求を持ち、対立を生きることによつて統一を生きねばならない人間存在が当然担うところの普遍的性格が、人間の尊厳の論拠とされていることである。人間は全宇宙にまたがる活動領域を持つこと、人間は全てのものになる能力、無限の可能性を有していること、全てのものを生み出し、全てを支配し、全てのものの内に浸透しようとする^⑨こと、フィチーノはここに浮彫りされるアニマの普遍性に人間の尊厳を結びつける。しかもこのアニマが宇宙の全構成の中心におかれていることよりして、私達是对立の統一者としての人間存在、そしてそのために構想された宇宙における人間の比類なき位置が、彼の人間の尊厳性の主張と不可分に結びついているのだと考えざるをえない。

私達は以上より、ロレンツィアーニの抱いた人間観をみてとることが出来る。彼らは第一に、精神的力量と身体的力量を分離して考えない。それを一体不可分のものとする。 *vita activa* と *vita contemplativa* は、決して別個のものではない。第二に、彼らは何にでもなれ、何でも出来ること、つまり人間能力の多様性、獨創性、普遍性を要求する。だから彼らは、一芸一能に秀でることよりも、万能であることを誇りとする。第三に、彼らは精神的能力と身体的能力を最高度に發展させることにより、神に近づき、神に挑戦し、神と競合し、遂には神たらんとする。それ故に彼らの理想的人間像とは、一個人の内に精神的 *virtu* と身体的 *virtu* が不可分に均衡を保ち、しかも両者相まつていざれも最高度の發展をとげた人間であり、一個人の内あらゆる人間的才能が開花するところの *nommo universale* であり、何一つとして不可能なき人間であつた。そしてロレンツィアーニはまさにこの点において、自己を誇りとすることが出来たであろう。職能未分化の時代にあつて、人が他を凌駕して自己の運命をきりひらいて行くために、万能人である必要があつた。ロレンツィアーニに

しても、唯経済人であるだけでは不十分であった。同時に政治家でなければならなかつた。そして加うるに知識人、教養人であることが要求された。フイレンツェ社会の支配者が、同時にフイレンツェ最高の知識階級でなければならなかつた。uomo di stato e umanista^⑮ これはロレンツィアーニの典型的なあり方であつた。そして人間能力の無限の可能性を人間の尊厳にのみこんだフイチーノの哲学は、まさにルネサンス的といわざるべきである。

- ① P. O. Kristeller, *Il Pensiero filosofico di Marsilio Ficino* (Firenze 1953), pp. 220-223.
- ② *ibid.*, p. 232, 254.
- ③ *ibid.*, pp. 235-237.
- ④ *ibid.*, p. 244, 258, 359.
- ⑤ *ibid.*, p. 259.
- ⑥ *ibid.*, p. 423, 428.
- ⑦ *ibid.*, p. 257. マンクローニの同様な宇宙を扱つて *Welt* *livet*, op. cit., pp. 56-57.
- ⑧ Kristeller, op. cit., p. 238, 360.
- ⑨ *ibid.*, p. 368.
- ⑩ *ibid.*, p. 369. フイチーノの名著「プラトニー神学」は、その副題として「靈魂の不死について」という表題を有してゐる。
- ⑪ *ibid.*, p. 99.
- ⑫ *ibid.*, p. 113.
- ⑬ *ibid.*, p. 113, 432.
- ⑭ *ibid.*, p. 113.

⑮ *ibid.*, pp. 104-105, 435.

⑯ *Disputationes Camaldulenses* における *Plurimulthia* によるフエネイヌ解釈は、その文学的表現といふべし。Welliver, op. cit., pp. 55-56.

⑰ Kristeller, op. cit., p. 427. ロレンツィオが又自己のソネットに対する注釈の中で、人生の矛盾について語つてゐる。Welliver, op. cit., p. 149.

⑱ 人間の尊厳についてはピコの方が有名であるが、ピコの論が出るまでに既にフイチーノの著作は完成されており、ピコもそれを知つたかと考えられる。Kristeller, op. cit., p. 119.

⑲ Kristeller は、フイチーノは人間存在をその普通性と宇宙における中間的位置において強調したと云う。Ficino and Pomponazzi on the place of man in the universe (Kristeller, *Studies in Renaissance Thought and Letters*, Roma 1956, p. 285) 猶宇宙をさける人間の位置の論にもう一つ、フイチーノが宇宙と影響を与えたものとして Kristeller は Ermete Trismegisto をあげてゐる。詳しくは Marsilio Ficino e Ludovico Lazzarelli (Kristeller, *Studies*, pp. 233-236).

⑳ *ibid.*, pp. 115-117.

㉑ *uomo di stato e umanista* とは Kristeller はよれば、家柄や社会的地位の故に共和国最高の要職につくこととなり、かつ同時に「ギリシヤ、ラテン研究をばその政治的活動と結びつけて、老練優美の文人との名声をさせた上流市民のことであり一四〇〇年代の終りから一五〇〇年代のはじめにかけて、フイ

チーノの学派と直接間接の関連を持った人々のことである。彼はその一人をとりあげている、Un uomo di stato e umanista fiorentino, Giovanni Corsi (Kriszteller, Studies).

又事実アカデミーに集つた人々の多くは市の要職に名をつらねた人々であり、同時にすぐれた文人であつた。会集者の名は、N. Robb, Neoplatonism on the Italian Renaissance (1935), p. 58.

五 アモーレ・プラトニコ

以上私は粗略ながら、フィチーノの哲学構想を述べてきた。これよりあるいは人は、フィチーノの思想を単なる理論、思弁とみるかもしれない。しかし私達は、フィチーノの本来の世界が宗教の世界であり、彼の哲学を根底において支えているものは宗教的熱情であることを忘れてはならない。又同時にロレンツィアーニにとつて、フィチーノは単なる彼らの世界観の理論的構成者であり、彼らがフィチーノ哲学の持つ思弁的傾向にだけ心ひかれたと考へてはならない。思弁的なものではなくて宗教的なもののみが、ロレンツィアーニをフィチーノのもとにひきよせたのである。他方フィチーノも、自分達の時代がもはや信仰の基礎

としての奇蹟に満足することの出来ないこと、自分達の時代は奇蹟の報らせの時代ではなく、合理的哲学的確証を欲しているのだということをよく承知しており、合理的哲学的確証は、宗教の道に到る手段だということをよく理解していた^①。そして哲学的教養をもつた人々、そして理性のみに従いなれた人々は、宗教哲学の助けを借りてのみ宗教の道を、したがつて永遠の救済を再発見出来るのだと彼は考へていたのである。彼の主著がプラトニ神学という表題を持つていることから知られるように、彼の思想は単なる哲学的プラトニズムではなくて、常にキリスト教信仰とわかちがたく結びついていたのである。

私達は既に、フィチーノがロレンツィアーニの一つの凝集核であり、彼らをフィチーノに結びつけたものは宗教的関心であることを述べたが、その現実における具体的表現を、フィチーノの主宰するプラトニ・アカデミーにみるこゝとが出来よう。

プラトニ・アカデミーは、決して単なる教養ある人々の知的な集会ではなかつた。勿論さういう面は持ち合わせていた。しかしより根本においては、彼らを結びつけた共通

の関心は宗教的なものであり、彼らの間に存した絆は、宗教的同胞のそれであつた。⑤ 事実フィチーノが、自己のアカデミーのメンバーを、又メンバー相互の間を結びつける絆として理論づけたところの *Amore platonico* ④ は、後世多

くの変容を加えられたにも拘らず、出発点においては宗教的なものであつた。それは、神と人との間に成立する慈愛と、人と人との間に存する友情の二つを含んでいた。即ちアカデミーに集つた人々は、何よりもまず神を愛する人々であり、アカデミーのメンバー相互の友情は、まさにこの神へと向う共通の愛の上に基礎づけられることになつたのである。プラトリー・アカデミー、それは一つの *con vivere* の世界であつた。それは現実世界における職業や、社会的地位、年齢等一切の差別を越えて共感が成立する世界であり、現実世界における差別的原理ではなくて絶対平等の支配する世界であつた。それは勿論ロレンツィアーニの集りとして、政治的世界における共属意識を持ちこんではいた。しかし、ここではその共属意識が、同じ政治的世界に参与することから必然的に生ずるところの同じ宗教的関心によつて、深められることになつた。アカデミーの集會が、家

族的で友情にみちた^⑥ 雰囲気を持つていた理由もうなづけよう。私達はプラトリー・アカデミーを、フィチーノを中心にした宗教的同胞の集り、ロレンツィアーニの心の集りとみることが出来る。

私達はルネサンス人を、享樂一方の、又瞑想一方の人間と考へないことにしよう。今享樂をうたつた人が、次の瞬間には神を求める人となるのであるから。又たとえ異教的であろうと、彼らのはげしい宗教的熱情を誤解しないことにしよう。十五世紀のフィレンツェ、それはすぐれて政治的であると同時に、すぐれて宗教的な時代であつたから。彼らは人間を謳つた、しかしそれは神を離れた人間ではない。彼らにとつて神を求めることと、人間の尊嚴を打ち出すこととは、同じ次元で行われたのである。十五世紀初期のプラトニスト、ニコラス・クザーヌは、反対の一致を神に求めた。フィチーノはそれをこの地上の人間に求めた。それをもつて、人はフィチーノの哲学を人間中心の哲学と考へるかもしれない。しかし、それは人間から神をきり離れたものではない。神と人とは常に結ばれていたのである。

いや、むしろ神と人とはより緊密な対抗関係の中へおかれたといつた方が当つていよう。ルネサンスとはそのような時代であつた。

- ① E. Garin, *Der Italienische Humanismus* (1947), S. 108.
G. Saitta, *Marsilio Ficino e la filosofia dell'umanesimo* (1954) p. 48.

- ② Kristeller, *Il pensiero*, p. 19.

③ 中世末期の世俗の宗教団体のプロト・アカデミーへの影響及フイチーノやアカデミーの宗教的性格については、次の Kristeller の興味深い論文がよい。Lay religious traditions and

Florentine platonism (Kristeller, *Studies*)

- ④ Kristeller, *Il pensiero*, pp. 307-308.

- ⑤ V. Rossi, *Il Quattrocento* (6° 1956), pp. 327-328.

On the *Ssu hu* 寺戸, Selves belong to the
Buddhist Temple in the *Tun-huang* 敦煌

by

Masaaki Chikusa

Among the documents found in *Tun-huang* 敦煌, are four about *Ssu-hu* 寺戸, all of which are in the period when Tibet ruled *Tun-huang* (781-847 A. D.). First of all, the service books of *Ssu-hu* in all temple of *Tun-huang* are in S. 542 v., which is an important resource to know the service of *Ssu-hu* organization at the time, and we can find that *Ssu-hu* in the period under Tibet control were in the state of serf. The system of *Ssu-hu* gave way to that of *Liang-hu* 梁戸 in the period of *Kuei-i-chün* 歸義軍 without any personal restriction, which, the transition of the *Ssu-hu* system, shows the change of *Tun-huang* society in the ninth century.

Florentine Platonism in the Fifteenth Century

by

Yoshiko Katayama

In the fifteenth century Italy was placed in the keen economical struggle for existence among the regional states. Here in Florence the Medici Party under Cosimo and Lorenzo de Medici intended to tide over this difficult situation by appealing to the political means. They tried to rule 'Stato' and 'Arti', and monopolize city government into their hand.

Thus more and more they were involved into political world and the more became political beings. But on the other hand the unrest and insecurity proper to political world led them to seek peace of mind. The more devoted they themselves to politics or economical activities, the more they had to feel emptiness in their own souls.

The Platonism of Marsilio Ficino, I think, is not at all the philosophy of seclusion, or *vita contemplativa* as A. von Martin said. Starting with the very consciousness of contradiction between *vita activa* and

vita contemplativa, Ficino intended to propose one solution to the inner struggle of homo politicus. In his doctrines of vita contemplativa, of God, and of the position of man in the universe we can see his solution, and furthermore the strong claim of dignity of man.

Stresemann's Foreign Policy and the Stability of the Weimar Republic

by
Nobuo Noda

The problem of the "collapse" of the Weimar Republic has generally been the most important theme in the historical studies of that period. In order to get the possibly reasonable solution of this problem, it is necessary for us to clarify the character of the "stability" of the Republic, which continued from 1924 to 1929. Because, the process of the "collapse" came as a result of the disappearance of factors, which were effective in supporting the "stability" during these six years.

In this paper, our aim is to illustrate some aspects of Stresemann's foreign policy, especially his policy toward the West, which covered almost the same period and was also playing a significant role as one of the stabilizing factors in the Republic.

With the Western policy of Stresemann in the centre, there was formed a wide front of the German political parties from the Social Democrats to the right-wing parties, because each of these parties was interested in the promotion of this policy for its own respective reason. Under the circumstances of that time, however, a necessary requisite for the effective promotion of Stresemann's "understanding" policy toward the west was to conduct the domestic policies on the basis of the Weimar constitution. This was why the political parties on the front were forced more or less to recognize this republican constitution and also why the stability of the Republic was kept all through the period, with which we are concerned.